

甲奴郷土史だより

第19号
2021年3月

甲奴郷土史研究会発行

祇園社領四箇保

近藤 昭夫

京都八坂神社が所蔵する「八坂神社文書」は、祇園執行職であった宝寿院伝来分と慶応四年（一八六八）に宝寿院繁継が還俗した社家建内家の所蔵文書（文書が社家の譲与家産として相続された）が、昭和五年（一九三〇）神社に寄贈されたものである。

元亨三年（一一三三）の「社家条々記録」に承徳二年（一一〇九八）、堀河天皇より祇園社へ寄進された四箇保の記述があり、古代後期から中世にかけて祇園社の根本神領となっていた。

四箇保について

（記述名称などは「甲奴町誌」による）

一 備後国小童保（広島県三次市甲奴町小童）

開発は祇園感神院大別当勝尊で保司職となる。

地域内の武塔神社は牛頭天王（武塔神）が祭神で立保以前から鎮座していたと思われる。須佐神社は創建が宝亀五年（七七四）と伝承があるが、武塔神社と思われるおそらく立保後に勧請されたようである。小童の祇園さんと呼ばれる。

一 丹波国波々伯部保

（兵庫県丹波篠山市・旧多岐郡地域内）

開発は祇園感神院大別当行円で保司職となる。立保後国司の収公があり、大治五年（一一三〇）に復活した。

承久三年（一一二二）波々伯部氏が下司職となる。戦国末期に三好氏の勢力下で保は崩壊。地域内に波々伯部神社があり、創建は貞観年間（八五九〜八七七）及び天徳二年（九五八）とも伝承されるが、立保後に勧請されたと思われる。丹波の祇園さんと呼ばれる。



◆武塔神社 出典：アメブロ

応仁の乱後、文明十七年（一四八五）の記録を最後に保は崩壊していった。



◆波々伯部神社 出典：ウィキペディア

一 近江国坂田保（滋賀県長浜市細江町）

開発は祇園感神院大別当勝尊で保司職となる。最初は犬上郡内に立保したが別所難済になり、細江郷内を保の代わりとした。建久八年（一一九七）細江保の立券宣言を受け、細江荘となる。嘉元四年（一一三〇六）には興善院領、元応元年（一一三一九）に日吉神社所領、文安元年（一四四四）ころには正親町宰相家領となり、後には祇園保と称した。長浜市祇園町あたりである。祇園町には、八坂日吉神社がある。早くに祇園社領ではなくなつた。



◆長浜市 日吉神社 出典：八百万の神

一 近江国成安保

（滋賀県東近江市蒲生町日野）

開発は祇園感神院大別当行円で保司職となる。蒲生上郡内に守富保、山上保、宮河保がある。鎌倉、南北朝、室町の各時代に押領や相続相論があり、延徳四年（一四九二）の記録を最後に保が崩壊した。宮川町に八坂神社がある。



◆宮川町 八坂神社 出典：rubese systems

承徳の四箇保寄進と背景

奈良時代の養老七年（七二二）に、土地を開墾すれば三代に限り土地の私有化を認めた三世一身法が定められたが、二十年後には廃止され、天平十五年（七四三）新たに墾田永年私財法が定められた。公地公民であった制度が、開墾によるものは私有地になることにより、時の藤原一族が免税特権のある功田や勅使田制度を援用して私有地を増やし、国有地も私有地化された。

藤原氏に私有土地を献上し、自分は代官として免税の特権を得るといふ地方地主が多出した。荘園の始まりであ

る。このようにして、藤原氏や有力寺社が免税特権を得て栄えたが、国の税収は激減し破綻に向かった。

その後、醍醐天皇の延喜二年(九〇二)後冷泉天皇の寛徳二年(一〇四五)及び天喜三年(一〇五五)に荘園整理令が出されたが、摂関政治の時代であり効果が少なかった。

治暦四年(一〇六八)に後三条天皇が即位。後三条は藤原氏を外戚としない天皇で親政を行った。



延久元年(一〇六九)に記録荘園券契所を設置し、荘園整理令を出す。荘園の整理を国司に任せず、中央の記録荘園券契所という役所で行った。荘園を取り上げ国衙領(公有地)とする目的であり、摂関領を含む多くの荘園が公領となった。藤原氏と距離を置く考えを持っていて、延久四年(一〇七二)に白河天皇へ譲位し、院庁を設置して上皇となるが翌年崩御する。院政の予定であったらしい。

白河天皇は応徳三年(一〇八七)に八歳であった堀河天皇へ譲位し、上皇となり院政を開始した。堀河、鳥羽、崇徳天皇の三代に渡り院政を行い、大治四年(一一二九)七十七歳で崩御。上皇は嘉保三年(一一〇九六)に出家し法皇となる。

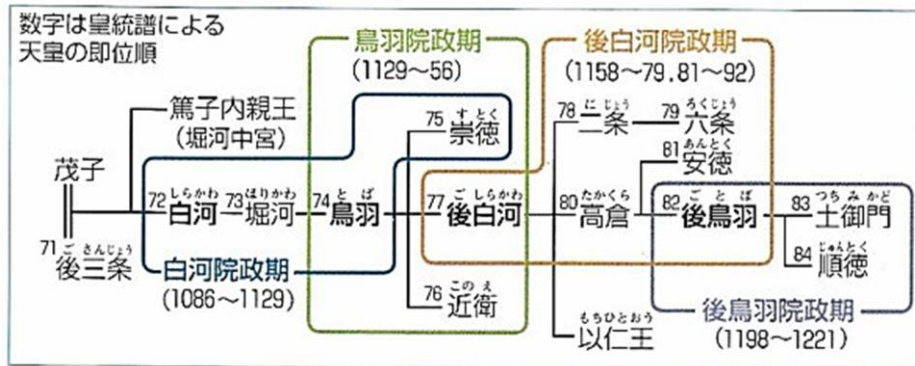
父の後三条天皇と同じ家格にとらわれない人事を行い、強訴に対抗のため北面の武士を設置した。白河、堀河天皇とも藤原氏を外戚とする。

堀河天皇は承徳二年(一一〇九八)の祇園社寄進時に二十歳であり、白河法皇の院政期であるが、関白藤原師通とともに親政を図っていた時期であり、法皇もこれを許容していた。

嘉保二年(一一〇九五)祇園社祈願の履行で、承徳二年(一一〇九八)の四箇保寄進は、堀河天皇の勅願であると思われる。承徳三年(一一〇九九)に関白師通が急逝し、その八年後嘉承二年(一一〇七)堀河天皇が崩御。摂関政治が院政に替わる時期にあたる。

その後鳥羽、後白河天皇の院政と平氏の武家政治を経て、中世には荘園形態も順次変わっていき、鎌倉、南北朝を経て、室町の戦国期を持つて荘園は崩壊した。

院政関係系図



◆院政関係図 出典：livedoor Blog



◆京都八坂神社

出典：LINE トラベル.jp

保(こころ)

平安時代後期(十一世紀後半)から中世にかけて「保」と呼ばれる新しい所領単位が登場した。人名や地名を冠して呼ばれ、荘、郷、別名と並び中世を通して存在した。

開発者は立保の申請を行い保司職となることが多い。在地領主とは限らず、有力寺社の僧侶や神官、知行国主や国守の近臣、中央官司の中下級官人など、在京領主と称される官司や権門関係者も多かった。開発と経営の成否は保司職の手腕に依ることが大きく、開発や権限である勸農権と官物収納権の行使や、保氏である住民組織の掌握などや徴税請負と相応の功力が必要である。

四箇保は在京系の京保の一種であり、便補の保で立保しており、国衙が封物確保の義務を免除される代わりに便補の措置のために祇園社感神院側に認められたものである。保司職は祇園社神人として高利貸しの活動を行い、蓄積や所領荘園の収取物や受領の任中に収取物の活用を行った。

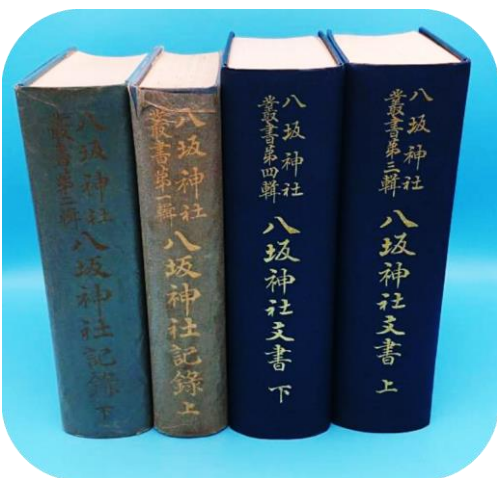
中世の「八坂神社文書」には、祇園感神院四箇保の内小童保を除く三箇保は元久二年(一二〇五)までに次々と官宣旨や院序下文により、国使不入・勅院事国使免除とされ、準官省符之地とみなされるようになる。下って永和三年(一三七七)の文書目録では、成安保、小童保、波々伯部保の三保がみられ、特に波々伯部保は独立して詳細な整理がなされていて、重要な所領となっている。

祇園社の所領は文書上「社領」として出てくるが、実際には社僧間の譲与対象となるものがあつた。文書も同じように社家の家産として相続されたと

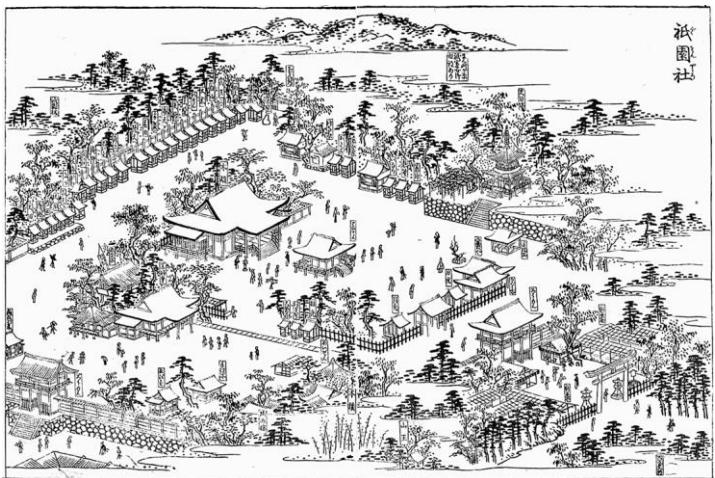
みることが出来る。

【参考資料】

- ・中世祇園社文書の特質 田中 誠
- ・神々の美の世界 京都国立博物館
- ・甲奴町誌 甲奴町誌編纂委員会
- ・小童村誌 小童村誌編纂委員会
- ・地方における牛頭天王信仰の受容と展開の一考察 鈴木耕太郎
- ・保の形成とその特質 義江彰夫
- ・角川日本地名大辞典(旧地名編) 勝山清次
- ・便補保の成立について 井沢元彦
- ・逆説の日本史 西東社
- ・天皇の歴史

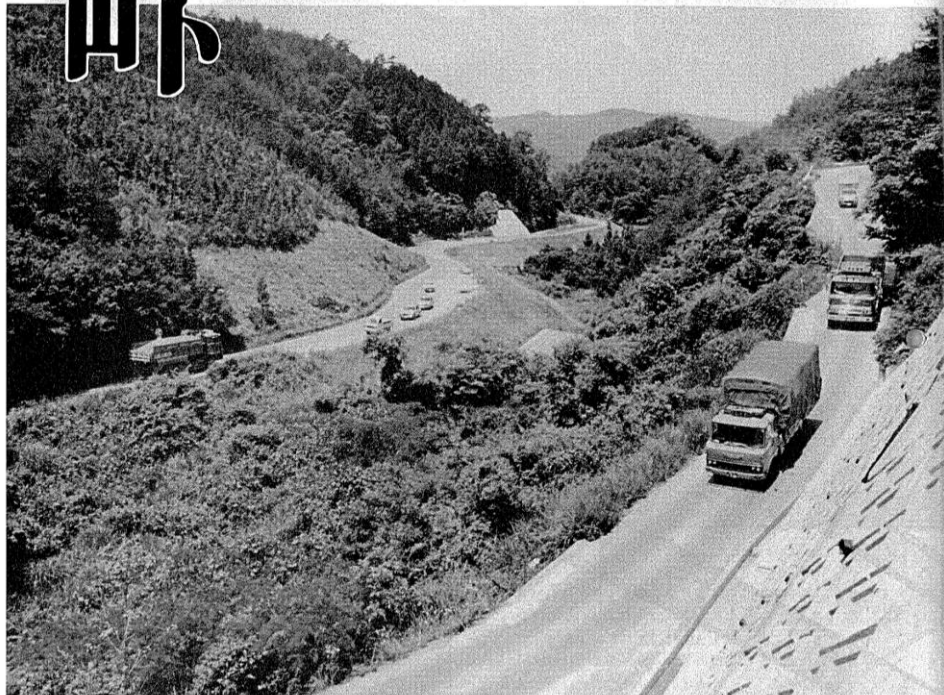


◆八坂神社文書 出典：日本の古本屋



◆祇園社(近世) 出典：Google Sites

峠を語る



道幅が狭くカーブの多い宇賀峠であるが、三次・福山間の近路とあって往来する車輛は多い。離合は待避所でないと困難だ。

宇賀峠

——吉舎側からすれば、吉舎から宇賀（甲奴町）へぬける峠だから宇賀峠、しかし甲奴の人からすれば、吉舎へぬける峠だから吉舎峠——。ざっとこんな具合で、同じ峠でも相対する相方によって呼称が違っているのである。

違うのは峠の名称だけではない。吉舎では話の語尾に「……のー」というが、宇賀では「……にゃ」という。吉舎の人は「三次へ出る」というが、宇賀の人は「三次の奥に入る」となる。

主要地方道上下—吉舎線にあるこの峠は、全長5km余、高低差約180m、峠としてはむしろ小さいくらいだが、備北と備南両文化圏の接点といった位置にある。

現在の峠道は明治27年に改修されたものだが、それまでは谷間の小川に添って続く幅1.2mほどの細い道で、通称『鍋割峠』と呼ばれていた。鍋を担いだ行商人がこの峠を歩いていて、道端にいくつも突き出た岩に当って鍋を割ったという古事由来している。

この鍋割峠はかつて出雲・石見と尾道を結ぶ雲石街道の中にあって、多くの人々がこの峠を往来したものであ

【峠を語る 宇賀峠】

昭和五十五（一九八〇）年第二十二号 榊書文社「げいびグラフ」より



郷土誌「げいびグラフ」から《ああ、懐かしの甲奴・・・》其の三

榊書文社さんが発行されていた郷土誌「げいびグラフ」から、甲奴町関連の資料で、掲載させていただく了承を受けた記事をご紹介します。

今回は宇賀を紹介した記事と、「私の秘蔵写真」と題した記事をご紹介します。

宇賀峠は、主要地方道吉舎油木線にあり、吉舎町を起点として甲奴町・上下町及び神石高原町に至る延長約三六キロの道路にあります。昭和四〇年代から改良に着手し、平成四年（一九九二）に全線二車線の道路改良事業が完了しました。

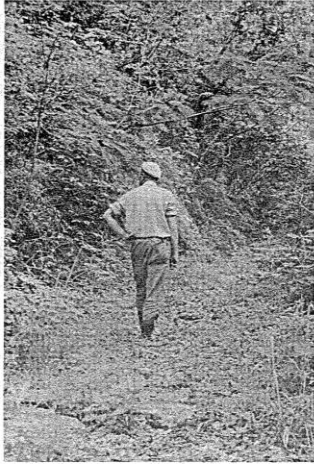
昔の宇賀峠を知っている人に聞くと、『ぐねぐねしとって、そりやあ冬は怖かったです。車が落ちたこともあるんよ。』現在も冬に利用しようと思うと少し怖いですが、以前の道はもっと大変だったんですね。

今回宇賀峠の歴史を調べてみると、銀山街道として利用されていただけでなく、『鍋割峠』という別名があったことも知りました。

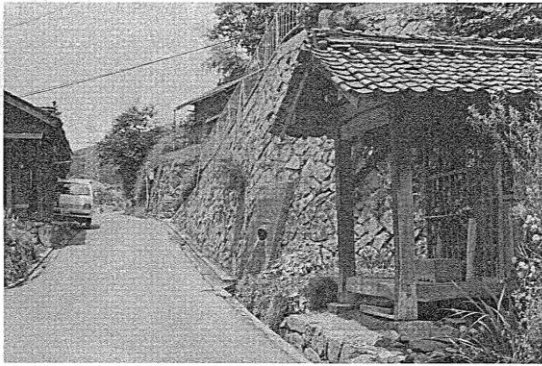
吉舎側から峠に向う旧日道の旧往還道。



宇賀側旧往還道。このあたりから峠にさしかかる。かつて旅人が一休みしたであろう辻堂も今に残っている。



かつての往還は今も通る人もなく、草木に埋れている。



った。元禄13年幕府直轄地（天領）として、石見国大森代官の支配下におかれた上下に、代官出張所が置かれたこともあって、大森銀が吉舎からこの峠を越え上下に、また甲山を経て尾道へ、そして尾道から船で大阪へ運ばれた、いわゆるシルバーロードであった。

また、当時お伊勢参りと称して京・大阪へ旅する人も多かったが、三次近辺の人々は殆んどこの宇賀峠を越えて上下から府中、そして山陽道へ出ていたという。

さまざまな目的をもって、多くの人が往來した旧往還も、新道がついてからは通る人もなく、今では草に埋れて当時を偲ぶものとしては、一里塚跡が頂上から少し下った吉舎側に残っている。3人で抱えるほどの松の大木であったが、惜しいことに大正末期に枯死してしまい、のち2代目を植樹したが、今では周囲の松の中に埋没してそれを知る人は少ない。ただ、ここから一里（4km）離れた吉舎町吉市にある塚松は、300有余年たった今も健在である。

新道になって甲奴側から吉舎への往來は頻繁になった。

かつて吉舎町の商圏にあった広定村（現在の宇賀・小童）の人々は、吉舎に市がたつと峠を越えて買物に行くのが常だった。

宇賀に住む福本大一さん（83）は「樽をかついで吉舎まで醤油を買いに行ったもんです。峠の頂上に茶店が2軒あって、帰りにそこでお茶と饅頭で一服するのが何よりの楽しみで……。旅人や荷馬車を曳く人がここで一休みしていて、結構茶店は繁昌していたようですな」

また、吉舎の羽森盛雄さん（80）も「毎日きまったように荷馬車が吉舎と上下の間を、数台連ねて往復していたので、わしら田圃に出とつても、ああ荷馬車が通るけえそろそろ昼時の一、ゆうて時計がわりにしとつたですよ」と、何れも昔を懐かしむようであった。

そうした悠長な風景も、自動車の普及増加によって次第に姿を消し、のどかだった峠に排気ガスがたちこめるようになった。乗用車の離合さえ困難なこの峠道は、カ

右側が旧道。左側が新たに完成したバイパス。道を向うは吉舎市街地



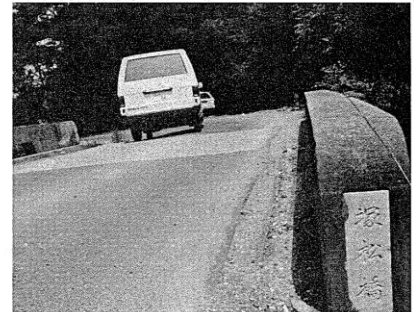
このあたりに一里塚があったが、今は探すのさえ困難だ。

ーブの連続であるにもかかわらず、三次方面から福山への一番の近路とあってトラックやダンプの往來がはげしく、冬にはスリップ、転落などで死亡事故が何件も起きている運転者泣かせの道でもある。

宇賀峠にトンネルを通すか、既存の道を拡幅するかは早くから論議されていたが、結局後者を採用して昭和48年から道路改修工事に着手し、既に部分的にはバイパスが完成して諸車が通行しており、58年までには全面2車線の快適な峠道になり、事故もなくなるものと期待されている。

宇賀の木村林一さんは「この道がよくなれば、吉舎まで5分で行けるでしょうにや。今まで上下に買物に行った人も、こんどは吉舎、三次へ行くようになるでしょうにや」

ドライバー泣かせのこの峠も、ここ数年のうちに見違えるような変身をするだろう。



一里塚のあるあたりを、地元の人々は「塚松」と呼んでいる。

私たちの学校



甲奴郡 宇賀小学校



→空欄にはこんなシャレたのも



→自分達の手で運営した想い出の運動会



←講堂でゲーム、人数が少ないから兄ちゃん達といつも一緒



針の使い方を習つてないけど上手だね

私たちの児童会

甲奴郡甲奴町立宇賀小学校
児童会長 新宅 真理

昨年から宇賀小学校の児童会では『自分達でできることは自分達でやろう』という目標を持って行事をやることにしました。

昨年の運動会でも『種目も運営も自分達で考え、良いアイデアを出し、楽しく、もり上がりのある運動会にしよう』という目標をたててがんばりました。運動会を自分達でやるのは大変なことなので、反省したら思いついたことが出てきました。でも、種目も自分達で考えたし班旗を作って1位の班はけいよう台にかかげることなどいろいろなアイデアを出してもり上がったので、成功できたということになりました。

その他、全校のキャンプも自分達のカでやり、みんな満足しました。今年は昨年とはちがう行事ももうけました。『このぼり大会』もその一つです。風船を使ったり、オバQのこのぼりを作ったりして、楽しいこのぼり大会ができました。

これからも、やりがいのある行事を作って行きたいと思っています。

→初夏の風に泳ぐ
コイノボリ



ボクらのコイノボリ 上がったゾー。



→児童会委員の会議風景。立派な会議室もあります。



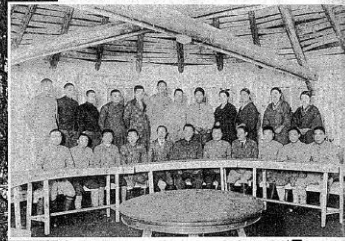
←風もあるし、今日は最高のコイノボリ日程



→班別アイデアを競うコイノボリ大会に奮闘中

【私たちの学校 甲奴郡 宇賀小学校】

昭和六十一年（一九八六）年第四十三号 株書文社「げいびグラフ」より



にちりんへいし
日輪兵舎
(甲奴郡甲奴町)

藤原辰郎氏蔵・談

の事業完遂を願って小童、宇賀両神社の宮司に頼み、祈願祭や献入れ式までどり行う熱の入れようでした。

用地は時の村長福原亮三氏の配慮で、修練農場横の通称一本葉の草地に決まり、大工に藤原徳昌、藤原秀、松田景雄の3氏を依頼、用材は付近の山林より寄付をいただきました。

一般に屋根は草葺きで回りは板と草で囲い、1~2日で仕上げる急ごしらえの建物が多いのですが、この日輪兵舎は屋根が杉皮葺き、回りは丸太という手の込んだ造りになっていて、そのため工期も1か月を要しました。

完成後は丸太による円形机を配し、ランプの下、夜遅くまで青年達の指導、教育がなされ、会議の場としても活用、旧態依然とした広定村に新風を送る意義ある場となりました。

その後、飲料の必要に迫られ、前重与市氏により広場の一角に井戸を掘って、さきやかな炊事場を作ったり、広場500坪と近くの山頂に遙拝所を作ったり、青年達は一畝一畝、モッコとオイコで周囲を整備していききました。

この建物は戦後も健在で、修練農場が広定中学に代わってしまっただけでも何年かそのままの姿が残っていましたが何時失くなったものか解りません。跡地は草が繁り、今となってはその存在を知る人も少なくなっただことでしょう。

私の秘蔵写真

どちらも今は無き、懐かしい木造小学校の建物と、戦時中に訓練の一環として建てられた建物の記事をご紹介します。

宇賀小学校は明治八年二月に設置され、記事の旧校舎は昭和三十年に新築されたと「甲奴町郷土誌 第三集 宇賀地区編」に記述があります。

記事の掲載年が昭和六十一年ですから、三十一年間の宇賀っ子達の想い出が詰まった校舎だったのですね。写真に写っている当時の子ども達の笑顔がとても印象的です。



事務局より

- ・会員募集中です。ご紹介ください。
- ・会の運営や研修内容について、ご意見やご質問何でも結構ですのでお聞かせください。
- ・「甲奴郷土史だより」にどんなことでも良いから、ご寄稿ください。
- ・古い写真や資料等を「甲奴郷土史だより」へ掲載していただきます。
- ・出品物につきましては、責任を持って返却しますので、ご連絡をお願いいたします。

連絡先 鶴本 節子（カーターセンター）

〇八四七―六七―三五三五